

## 日本史B

### 【解答】

#### I

問1	問2	問3	問4	問5
イ	エ	イ	カ	ウ
問6	問7	問8	問9	問10
エ	イ	イ	エ	ウ
問11	問12	問13	問14	問15
イ	イ	エ	エ	エ

#### II

A	B	C
末法	法然	親鸞
D	E	F
一遍	伊藤博文	天皇
G		
貴族院		

#### III

豊臣秀吉が二度にわたって行った朝鮮侵略戦争。1592年、秀吉は中国制圧をもくろみ、派兵（文禄の役）。朝鮮の反撃や明の参戦により停戦し、講話交渉に入るが決裂する。1597年に再出兵（慶長の役）するが、秀吉の死去により撤退した。この戦争は朝鮮側に甚大な被害を与えただけでなく、豊臣政権の崩壊の一因ともなった。

## 【学習アドバイス】

本学の入試は、例年5科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となるので、各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には50分程度が解答時間となる。本年度の問題では、7世紀から昭和初期までが出題され、古代・中世・近世・近代とバランスよく出題されている。本年度は出題されていないが、現代が出題されたこともある。分野では、政治史が多く、次いで外交・文化・社会経済と出題されている。中には、あるテーマについて古代・中世・近世・近代の順に選択肢が登場するという正誤判定問題もあった。いずれにせよ本学の受験生は、まず全時代をまんべんなく学習しておく必要がある。そして、政治史中心の出題ではあるが、文化史・社会経済史も出題されているので、政治史に偏った学習は避けた方がよい。解答は選択式と記述式が併用されているが、選択式は正誤判定・空欄補充・年代配列からなり、また記述式は空欄補充・150字程度の論述で構成されている。本年度は出題されていないが、記述式で誤文訂正が出題されたこともあるので注意したい。問題レベルは、高校の教科書範囲内の標準的なものであるが、単なる語句や人名などの暗記だけでは対応できないものが少なくない。とりわけ、選択式の大半を占める正誤判定問題に対応するためにも、史実の正確な理解を深めておきたい。

日本史で高得点をとるためには、教科書、塾や予備校のテキスト、用語集を活用しながら、語句や人名などの用語に関して5W1H(→6W1H1R)を念頭に置いて理解しておく必要がある。Who(誰が)、What(何を)、When(いつ)、Where(どこで)、Why(なぜ)、How(どうした)のかを考え、知識を吸収するということである。これにWhom、Resultも加えると、より理解も深まろう。そして、大学入試の問題集を解くことで、吸収した知識を定着させたい。意外なことに知識を誤解している受験生が多いので、その修正のために問題演習が必要になってくる。そして、正誤判定問題の対策として、センター試験対策の問題集を用いるのが効果的だと思われる。特に、誤文がWhen、Where、Who、Resultなどの部分で作られているところなど、センター試験は本学の選択式の問題に類似している。もっとも、その際に肝要なのは、間違っただけを必ず教科書、塾や予備校のテキスト、用語集で確認することである。なお、一問一答形式の問題集は、正誤判定問題では効果があまり期待できない。

さて、本学の受験生の多くが困惑するであろう問題は、150字の論述問題であろう。ただし、これも6W1H1Rを考えながら、メモをとって答案作成すれば問題はない。例えば、「文禄・慶長の役について、知るところを述べなさい」の場合、Who(豊臣秀吉が)、What(朝鮮への出兵を)、When(16世紀の末)、Where(朝鮮半島で)、Why(明の国力の衰退を機に東アジアの伝統的な国際秩序が変化していたから)、Whom(朝鮮に)、How(大軍を派遣した)、Result(豊臣政権を衰退させる原因となった)などと答案を作成していけばよい。基本的なレベルの用語(用語集の教科書掲載頻度の高いもの)を中心に、150字以内で説明する訓練をしておけば、論述の恐怖心もなくなるはずである。そして、書いた答案は、題意にあっているか、論旨は一貫しているか、史実や年代配列に間違いはないか、誤字・脱字はないか、そして文章として意味が通じているかなどの点検が必要となってくる。高校や塾の先生に添削指導してもらえれば、「恐るるに足らず」である。

一方、本学の日本史問題において比較的平易なレベルのものは、記述式の空欄補充問題である。ここで問われているのは、高校教科書の太字の箇所である。ただし、漢字のミスをしてはいけない。正確な漢字で書くことが求められているので、普段の学習から手を動かして用語を覚えておくべきである。また、選択式の年代配列問題は、When(いつ)をつねに念頭に置いて用語を覚えておく必要がある。過去問演習などで間違っただけの問題は、高校の教科書の索引の前後にある年表も活用して、入念にチェックしておきたい。

以上のような対策を着実に積んでいけば、必ず合格への道が開けるはずである。